

社会学部設立30周年記念論文集発刊に際して

今年度は社会学部が 1960 年に発足以来 30 周年を迎え、社会学部の専任教員のほぼ全員が執筆して 30 周年記念論文集を発行する運びとなりました。

社会学部の前身の文学部の社会学科は大正 4 年（1915 年）に設置されており、その時から数えると実に 85 周年に当たり、さらに昨年関西学院 100 周年を祝ったばかりでありますので、学院創立 101 周年にも当たり、文字通り新しい世紀の第 1 年という記念すべき年を迎えていることになります。

社会学部の前史に関しては 1964 年の「関西学院創立 75 周年、社会学科開設 50 周年記念論文集」において当時の社会学部長の余田博通先生が「記念論文集発刊に際して」の中で力を込めて詳述しておられますので、社会学部設立以来の歩みを少しまとめてみようと思います。

本社会学部が 1960 年に発足した時は、立教大学と一橋大学以外には社会学部は存在しなかったのであります。その意味で本社会学部は西日本で最初の学部として注目されました。当時の関西学院大学要覧によりますと、次のように記されております。「関西学院大学は昭和 35 年を期して社会学部を新設することになった。従来本学において既に神戸の原田の森にあった当時より専門部に社会学科を置き、戦後新制大学発足後、これを文学部の社会学科、社会事業学科に拡充、発展させて……きたが、今回この 2 学科にマス・コミュニケーションを対象とする広報社会学および産業社会学を加えて社会学部を開設するに至ったのである。」さらに翌年には文学研究科から分離独立して修士課程に社会学専攻・社会福祉学専攻、博士課程に社会学専攻を設置しました。なお 1978 年には博士課程に社会福祉学専攻を加えることになりました。

学部創設時の教員スタッフの陣容は下記のように、大道安次郎教授を初代の社会学部長として社会学、社会福祉学を中心とした専門教育科目を担当するスタッフおよび一般教育科目を担当するスタッフを合わせて 27 名（助手 3 名を含む）からなり、4 年後の完成年度には 35 名となり、その後はほぼその数を維持し、現在の在職教員数は 38 名となっています。また 30 年間の在職教員総数は 73 名に上り、8 名の名誉教授を送り出しております。学部創設期の先生方の顔ぶれは次に示した通りですが、その中で現在も学部で活躍されているのは、

田中國夫先生を始め数名となっており、その間、他大学に移られた先生方も多数ありましたが、在職中にお亡くなりになられた、学部にとってかけがえのない先生方もありました。学部長も務められた、山中良知先生、余田博通先生、それに在職期間は短かったが学部の知的活性化に貢献された安田三郎先生を残念ながら失いました。さらに一昨年、1989年3月には学部発足以来、学部の名物教授としてその名を轟かされた、萬成博、領家穰の両先生が退職されました。

なおまた、本学部から武田建先生が1985年から1989年まで学長職に就かれました。宮田満雄先生は現在院長の要職に就かれております。

社会学部講義担当教員

教 授	経済学博士	大 道 安次郎	社会学原論、都市社会学、研究演習
”	文学博士 B.A. M.A.	竹 内 愛 二	社会福祉学原論、ケース・ワーク、研究演習
”	医学博士	杉 原 方	精神医学、研究演習
”	文学博士	蔵 内 数 太	社会学、文化社会学、研究演習
”	文学士	小 関 藤一郎	社会学史、研究演習
”	B.A. B.D. M.A. Ph.D.	S.M. ヒルバーン	英語、社会史、文化史、研究演習
”	B.A. B.S.W. M.S.W. D.S.W.	L.B. グレアム	社会福祉事業組織、社会福祉学特論、研究演習
助 教 授	経済学士	余 田 博 通	社会政策、農村社会学、研究演習
”	文学士	定 平 元四良	社会思想史、社会学特論、研究演習、実習
”	M.S.	嶋 田 ツヤ子	児童福祉、社会福祉学特論、研究演習、実習
”	文学士	万 成 博	産業社会学、産業社会学特論、研究演習、実習
”	文学士	領 家 穰	社会調査法、社会学特論、研究演習、実習
”	文学士	田 中 国 夫	心理学、社会学特論、社会心理学、研究演習
”	文学士	山 中 良 知	哲学、倫理学
”	文学士	栃 原 知 雄	英語
”	M.A.	西 尾 朗	英語、時事英語
宗教総主事 (兼 担)	B.A. B.D. D.D.	河 辺 満 夔	基督教概論
専 任 講 師	文学士	本 岡 五 男	独語
”	文学士 M.A.	杉 山 貞 夫	外国語講読

専任講師	文学修士 M.S.W.	武田 建	外国書講読、グループワーク及び コミュニティオーガニゼーション
専任講師	文学修士	倉田 和四生	社会学、外国書講読
専任講師	文学修士	牧 正 英	社会学、外国書講読
専任講師	文学修士	丹 羽 春 喜	外国書講読
専任講師	文学修士	張 光 夫	外国書講読
助手	教育学修士	国 分 康 孝	
助手	文学修士	宇 賀 博	
嘱託	文学修士	太 田 義 弘	

また、今までに（1990年10月現在）送り出した学生数は12,732名に及んでいます。

学部のカリキュラムは学部完成年度の1964年当時のものを見れば、専門科目として75科目を置き、そのうち社会学原論、社会心理学、社会倫理学、社会調査法、社会統計学、外国書講読、研究演習を必修科目とし、専門科目を類別編成しています。第1類（理論社会学コース）、第2類（社会福祉学コース）、第3類（広報社会学コース）、第4類（産業社会学コース）がそれであり、そのうちのいずれかから必要単位の履修を求めています。このカリキュラムの最初の構想は、その後二度にわたって大きな改正が行われていますが、最初の改正は完成年度を超えた1965年に専門科目を整理し、社会学の基礎科目と研究方法としての数理計量的科目を充実するために20科目近い科目を新設しています。さらに、先に構想された4つの類の学制的性格を避けるという考えをより徹底するために、新たに科目群をA B C Dに分け、各類の専攻はそれぞれの類と関係の深い科目群から主要選択科目数を満たしながら他の科目群からもある程度以上の単位の履修を課するという方法を採用したのです。因みに、A群は社会学原論や社会福祉学原論のような社会学ないし社会福祉学の基礎科目や研究の方法論を中心とした科目群で、これには応用数学のような数理計量的科目が含まれています。B群は社会福祉学関係の科目を中心として家族社会学、村落

社会学、都市社会学や文化人類学、文化史、性格発達論のような社会の基礎集団、文化・パーソナリティの領域で、かつCD群からはずれる対象別の社会学研究領域をカバーすることを目指しています。C群は社会過程論としてのマス・コミュニケーションを中心に編成されており、D群は社会の産業・経済的側面を中心とした社会の制度・組織、人間行動を問題とする領域としてカリキュラム編成されています。さらに第1類は特に社会学専攻の性格を明確にするために、IとIIに分け、後者のコースを選ぶ者は社会学の純理論や方法論に関する科目や数理計量的理解の基礎となる科目の履修を求めています。

1970年に大きなカリキュラム改正を行い、その後部分的改正を加えましたが、その時のカリキュラムの基本的性格を変えずに現在に及んでいます。その改正に大きな影響を与えたのが1967年頃から始まった全国的な大学紛争であり、本学も例外なく大学紛争の嵐の中に巻き込まれ、その所産ともいえるべき大学改革の一環としてカリキュラム改革が議論されました。それは特にそれまでのカリキュラムに弾力性を持たせ、学生のニーズを反映させる所に特徴があったといえます。

大学問題は日本の高等教育の在り方という国公立・私立を問わず共通の課題状況にありましたが、特に私立大学は政府の不適切な経済政策と貧弱な文教政策に由来する財政難に見舞われ、その結果教育・研究の劣悪化という二重の苦難に直面したのであります。増加する大学進学 of 国民的要求を満たすという社会的責任と財政上の理由で不可避免的に学生数は増加し、それが大学としての教育・研究条件を充実することとの間に矛盾を生み出し、私立大学の共通の苦悩となっています。本学部においても基本的にはこのような条件に制約されながら、教育活動の効果を上げるために1970年の改正を行ったのであります。ここでは設置する専門科目にはあまり変化を加えず、ただ学問の新しい発展を採り入れるために、社会工学、コンピューター論、システム一般理論、システム分析、情報科学論のような科目を新設しました。改正の主要点は、まず必修選択科目を研究演習その他少数の科目に減らし、先のABCDの科目群をほぼ第1類から第4類までの各類の必要専攻科目に位置づけ、その4類から主専攻の

類を選択させ、それ以外の類を副専攻として選択させるという現在の主専攻—副専攻方式の骨子が出来上がったのであります。これに類とは無関係（他学部の科目も可）に若干の科目（8単位）（系列任意）を自由選択できることによって科目選択の自由化を図ったのであります。

本学の大学改革は、紛争当時の小寺学長代行提案の「改革案」にその姿勢が示されていますが、当時全学的に改革案作成のために多くの委員会が設けられ、教員は皆そのために忙殺されたものです。改革案の実施はその後漸次行われ、リコール制を含む学長選考規定、大学評議会や教授会などの学内制度の改正、助手制度の改革など一連の改革を実施してきました。教育改革としてはカリキュラム改革を初め1、2年生への基礎ゼミの導入などによる小集団教育の重視、学問の多様化に対応するための総合コースの開設、同和教育への取り組みといった諸問題を全学的課題として実施しています。

その後の1980年代に入って平常化した大学状況の中で、日本社会の近代化も成熟化の段階に達し、新しく現れてきた研究動向を採り入れるべくカリキュラム検討を持続的に行う努力を払ってきております。特に専門教育の実験講座化を進めるため、ほぼ全ゼミナールに実習・実験の科目を併設しています。さらに国際化に対応して特に研究における交流が年を追って盛んになり、年間の海外からの著名な学者の訪問はますます増大する傾向にあります。T. パーソンズ、N. ルーマンなどの社会学者や最近是中国、韓国の研究者を迎えて、交流を図っております。

入試制度についてもいくつか改革を加えて来ました。すなわち、一般入学試験、従来からある高等部推薦入学に加えて一般推薦入学、帰国子女等・外国人留学生入学試験がそれです。それに来年度1992年からスポーツ・文化活動に秀でた者を対象とする自己推薦入学制度を実施することになり、入試制度の多元化による学部活性化を試みております。

本年は30周年を祝して関西社会学会、日本社会心理学会、日本社会福祉学会を関西学院大学において開催することができました。

学内の研究システムとしては、社会学部研究会を構成し、ほぼ毎月研究会や

講演会を開き、「関西学院大学社会学部紀要」を年2回刊行しており、本記念号は63号に当たっています。因みに創刊号の目次は下記の通りです。

このように、本社会学部はその前史を含め多くの先達の努力と業績を受け継ぎ、さらに一層の前進を目指して研鑽を重ねる使命を担っていることを自覚せざるをえません。まさに聖書の言葉、「真理は汝らに自由をえさすべし」という社会学部のモットーを実践しなければならないのではないかと思う次第です。

関 西 学 院 大 学 社会学部紀要 創 刊 号

創刊のこたば	大 道 安 次 郎
専門社会事業と宗教	竹 内 愛 二
近代的経営者の社会的責任の問題	小 関 藤 一 郎
社会階級と社会移動	万 成 博
寺院分布と地域の評価試論	領 家 穰
進歩的態度に関する因子分析的研究	田 中 国 夫
ソビエト経済学の脱皮	丹 羽 春 喜
心理小説の三つの型	栃 原 知 能
構造機能分析の展開	倉 田 和 四 生
問題解決集団に於ける課題役割と社会的役割	牧 正 英
行動科学職業特にケースワークにおける自己覚知の意義と方法	国 分 康 孝

1 9 6 0

関西学院大学社会学部研究会

今、世界は「ベルリンの壁」の崩壊に象徴される米ソ対立の水解に始まる想像を絶した変動が世界を襲っておりますが、特に最近の湾岸戦争という憂うべき事態に直面しています。あらゆる意味の自由を守るために、この戦争の一日も早い平和的解決を念じてやみません。

1991 年 3 月

社 会 学 部 長

遠 藤 惣 一